

第 26 回日本時間生物学会学術大会開催報告

三枝 理博[✉]

金沢大学 医薬保健研究域医学系 統合神経生理学

令和元年（2019年）10月12日（土）、13日（日）の2日間にわたり、金沢市文化ホール会議棟において、第26回日本時間生物学会学術大会を開催しました。台風19号の接近のため、一時開催が危ぶまれましたが、一般参加および招待者を合わせて333名の参加を得て、無事に終えることができました。

本学術大会では、「時間生物学の新潮流 Neo-chronobiology」と題し、数理から分子、個体、医療、社会環境、産業応用まで多岐にわたる分野の最先端研究を発表・討論していただく場をすることを目指しました。特別講演では、体内時計と腸内細菌叢との密接な連関についての重要な報告が相次いでいることを受け、マイクロバイーム（常在微生物叢）のご研究で世界的に著名な早稲田大学・服部正平教授に、「ヒトマイクロバイームのメタゲノミクス」とのタイトルでご講演いただきました。また、体内時計研究の第一人者で米国時間生物学会（Society for Research on Biological Rhythms）の president でもあるワシントン大学セントルイスの Erik Herzog 教授に、「What wakes us: Networked circadian clocks in the brain」のタイトルでご講演いただきました。シンポジウムは、「生物時計の発振と同調機構にみられる共通性と多様性」「細胞・組織・個体に表出されるリズムの自律性と非自律性の分界」「生物の多様な集団発振現象」「体内時計と心の健康」「時間医学 from bench to population」「時間生物学研究の産業応用」の6セッションを、オーガナイザーの先生方に編成して頂き、大変密度の濃い発表と活発な討論が行われました。また、139の一般演題がポスターにより発表されました。これに先立ち、ポスター発表者全員が参加するデータブリッツも行い、大いに盛り上がりました。研究対象の生物種は、細菌から植物、昆虫、魚類、鳥類、齧歯類、マーモセット、ヒトまで広範囲にわたり、またその研究内容は分子メカニズムから細胞・個体の生理学、時間医学・時間薬理学、メンタルヘルス、疫学研究、産業応用（畜

産、化粧品、食・栄養、交代勤務者の睡眠管理、植物工場など）まで多岐にわたり、当学会の学際性が遺憾なく発揮されたものとなりました。10題の一般発表に優秀ポスター賞が授与されました。

第一日目夜には、情報交換会が行われ、166名の参加があり、貴重な情報交換の場となりました。金沢の食も楽しんで頂けたと思います。第二日目には学術奨励賞の授与式・受賞講演も行われ、今年度の基礎科学部門には東京大学・金尚宏氏の「概日分子ハンテイングと振動原理の追求」、臨床・社会部門には杏林大学・高江洲義和氏の「双極性障害と概日リズム睡眠障害の関連ならびに時間生物学的治療介入の再発予防効果」が選ばれました。前日の10月11日（金）には金沢大学・瓜生耕一郎博士の企画で、「概日時計の数理：基礎となる考え方とその展開型」と題した時間生物学トレーニングコースが開催されました。体内時計研究において数理モデル構築は、非常に強力ではありますが、実験屋にとってはなかなかハードルの高いアプローチです。本トレーニングコースでは日本時間生物学会を代表する理論屋5名が数理研究の基礎と応用を分かりやすく説明し、実験屋との距離を縮める良い機会となりました。

今回の金沢大会では、大学院生や若手研究者の新規学会員も大幅に増え、本学会が益々活気溢れるものになりました。加賀藩の時代から学問の盛んな金沢より、時間生物学のさらなる可能性・発展の方向性を発信することができたと思っています。

最後になりましたが、本学術大会開催に際し、特別講演・シンポジウム共催の新学術領域研究「宇宙に生きる」「オシロロジー」、ご協賛いただいた企業および団体、またご講演いただいた先生方、ご参加・ご発表いただいた皆様、大会の準備に携わっていただいたプログラム委員、大会準備員とその研究室メンバーの皆様方のご協力に対し、大会長として心から感謝申し上げます。睡眠学会との合同大会となる第27回学術大

会が更なる盛況を迎えることを祈念して、開催報告と

させていただきます。



写真1 ポスターセッション。

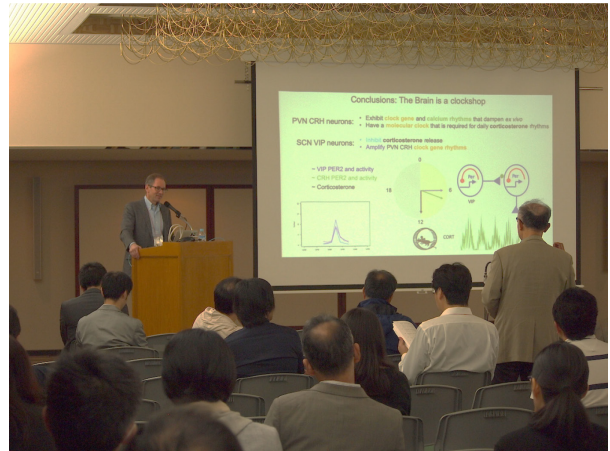


写真2 Herzog 博士の特別講演。

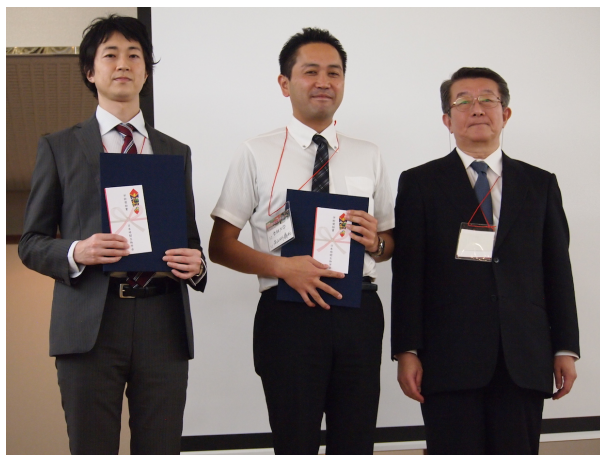


写真3 奨励賞授賞式。受賞者の金尚宏博士(左)、高江洲義和博士(中)、および深田吉孝理事長(右)。



写真4 優秀ポスター賞表彰式。

